

春岡村の伝説

■春岡村に伝わる物語一■

春岡村は明治二十五年、深作村、丸ヶ崎村、小深作村、宮ヶ谷塔村の四つの村が一緒になってできました。今回は春岡の郷土史を書いた銭場佐一郎さんがむじなに化かされたお話です。

●むじなの話

わが村には昔からむじなは沢山棲んでいたようである。

筆者が幼少の頃、小学校(春岡小学校)の校舎は殊の外こわれ、裏の戸棚はいつもあきっぱなしだった。

当時、裏の山林にはむじながいて、夜廊下の上がって寝ていたことがある。宿直の先生が朝起きて何気なく廊下に出てみると、小狗(こいぬ)がいるので追い出そうとすると、それがむじなだったとはよく聞いた話である。

筆者が学生時代、大学で剣道の寒稽古を終えて帰る途中、当時はよい道がなかったのでも小深作の神明社の側を通って見沼用水の土堤に出て帰ったのだが、小山慶次さんの前には竹藪があつてその中に墓があつたが、そこへ五十位灯火がついたことがある。筆者が瓦の破片を拾って投げ込むと一度にパッと消えてしまふ。こんなことが二度あつた。ここでは小沢清治さんも同じ状態を見たことがあるといっている。

筆者はまた、稲荷台の仮橋で、水もないのに身投げをするのを見せられたこともある。波紋は描いているが一向に浮かび上がらない。古老の言によると灯をつけることと身投げはむじなの得意の芸である。

この話は、大正八年から十二年にかけて、実際にあった話である。

むじな…アナグマ。歳を取ると人を化かせるようになるという。諺に「同じ穴のむじな」



……
出典・銭場佐一郎『思い出の春岡』(図書館蔵)
明治三十四年深作生まれ。教職の後、村の助役、村会議員を歴任。
学生時代に春岡村の郷土史を編むことを志し昭和四十三年に完成。